

日本イギリス哲学会 第52回 関西部会例会

日 時：2015年7月25日（土）13：00～17：50

場 所：キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

交通アクセスは裏面の図でご確認ください。

報 告 1：13：00～14：30（討論を含む）

報 告 者：岡村 太郎（京都大学大学院 文学研究科博士課程・日本学術振興会特別研究員DC）

題 目：誇りはどのような志向性をもつのかーヒュームの情念論ー

報 告 2：14：40～16：10（討論を含む）

報 告 者：木宮 正裕（京都大学 経済学研究科）

題 目：アダム・スミスの国家における同感と利益

報 告 3：16：20～17：50（討論を含む）

報 告 者：武井 敬亮（京都大学 経済学研究科 経済資料センター）

題 目：J. ロックの『聖書』解釈と E. スティリングフリート批判

なお、各研究報告の要旨は、添付の別紙をご覧ください。

例会の後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。

また、12月19日の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し出ください。

関西部会担当

久米 暁（関西学院大学、exkume@kwansei.ac.jp）

竹澤 祐丈（京都大学、Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp）

（◎を@に直して下さい。）

<会場案内>

キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る

（ビックカメラ前、JR 京都駅ビル駐車場西側）

TEL 075-353-9111



<日本イギリス哲学会 第52回関西西部会例会 報告要旨>

報告1：誇りはどのような志向性をもつのか—ヒュームの情念論—

岡村 太郎

われわれの心的状態の多くは何か「について」のもの、あるいはそれに「向かう」ものである。リンゴについて考えるとき、その思考は何らかの仕方でリンゴという対象に向かっていく。これが「志向性」と呼ばれる心の特徴である。デイヴィッド・ヒュームがこうした心のもつ「志向性」について明示的に語ることは少ない。しかし、『人間本性論』において、たとえば「誇り」という情念は「自己」に「向かう」ものであるとされ、こうした意味で理解される限りでの志向性を有するものとして描かれる。この誇りのもつ志向性はどのようなものであるのかが、本発表の問題である。

具体的な問題は以下である。ヒュームによれば情念は「他の対象への関係をもたない」(T 2.3.3.5)のものであり、「快さ」という感じによって特徴づけられる単純な印象である。しかし一方でヒュームの記述を見ると、誇りの志向性は、それが自己という対象と関係をもつことによって初めて成立するように思われる。加えてヒュームが熱心に誇りの発生のための諸原因を列挙しているところから、誇りの志向性はこれらの諸原因との関係の上に成り立つものであるようにも思われる。このように、誇りの志向性は、他の対象との関係からなる外在的性質だと思われるのである。これまで多くの解釈者は誇りの「単純性」というヒュームの記述を弱くとり、後者を強調することによって誇りの志向性についての「外在主義的解釈」を提示してきた (Baier 1991, Garrett 2006, Schmitter 2009 など)。しかしこれらの解釈はヒュームのテキストを捉えきれてないとし、誇りの「単純性」と「志向性」を両立させるべく、志向性を誇りに内在的な性質であるとする「内在主義的解釈」も登場している (Qu Forthcoming)。しかし誇りは他の対象との関係によって成り立つものであるとヒュームが考えていることも明らかである。本発表では、誇りがもつこうした二つの側面を適切に理解することを試みる。

(京都大学大学院 文学研究科博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC)

報告2：アダム・スミスの国家における同感と利益

木宮 正裕

本発表では、アダム・スミスとアダム・ファーガソンの社会観の比較を通して、スミスの国家 state に関する考察を行いたい。1707年のイングランドとスコットランドの合邦では、富と徳という問題のみならず、利益と愛着という問題が提起された。そして、ジャコバイトの蜂起や、その後のイングランド人とスコットランド人との反目は、利益の論理のみでの完全な統合が達成されるのか、あるいはどのように愛着が達成されるのかといった問いを引き起こした。それに対する回答の一つが、同感 sympathy 概念の使用による愛着の形成の議論だろう。しかし、ロウランド出身のスミスと、ハイランド出身のファーガスンには（同感という言葉の使用も含めて）相違が存在する。この意味や同感の限界を検討し、E.L. Khalil (2013) に倣って共同体の形成とその範囲に関する問題を取り上げつつ、スミスの国家における同感（愛着）と利益（効用）の問題を考えたい。

（京都大学経済学研究科 研修員）

報告3：J. ロックの『聖書』解釈とE. スティリングフリート批判

武井 敬亮

ロックにおける『聖書』解釈と政治論の結びつきについては、『統治二論』「第一論文」のフィルム批判の中で明確に看取できるだけでなく、その重要性については、Kim Ian Parker (2004) や Victor Nuovo (2011) などによっても指摘されている。実際17世紀においては、国家と教会（政治と宗教）の権力や管轄権をめぐる争いに際して、『聖書』に依拠して政治的主張を行うことは、ひとつの議論の「型」となっていた。

本報告では、1681年頃に執筆されたロックの『スティリングフリート批判に関する論稿』（MS Locke c.34）を取り上げ、『聖書』解釈に注目して分析を試みる。この『論稿』は、国教会体制の正当性を主張する当時の有力な聖職者エドワード・スティリングフリートの著作（『分離の災い』『分離の不当性』）に対するロックの批判や彼自身の見解を記したものである。この『論稿』の分析を通して、『聖書』に依拠したロックの議論を具体的に確認するとともに、同時代人との比較を行いながら、ロックの『聖書』解釈の特徴を示したい。

（京都大学経済学研究科・経済資料センター・ジュニアリサーチャー）